

## 「益荒男」から Be Ambitious! へ

木下 和朗

「あなたが思う益荒男ますらおぶり」について書くというお題をゼミ論集編集委員からいただいた。正直なところ、難解なお題である。そもそも「益荒男」とはどのような意味か。今日、益荒男と言えば、相撲力士のシコ名のように聞こえ（益荒雄）、日本酒の銘柄にあるそうだが<sup>1, 2</sup>、日常生活においては滅多に用いられることのない用語である。ちなみに Google<sup>3</sup>でインターネット検索すると、怪しげな Websites がたくさんヒットしてしまった。

そこで、益荒男の語義を調査することにした。配付された「ゼミ論集付録（案）」と題する企画書（本論集プロローグ）においては、益荒男につき、「男子の美称、りりしい男子、弱音などを吐かない立派な男性」という金田一春彦博士による語義が紹介されている。確かに、これは現代における用法を踏まえたものであろうが、釈然としない。続いて手元にある『広辞苑 [第5版 CD-ROM 版]』を引く。この辞書には最近悪評も聞かれるが<sup>4</sup>、調査の基点にはなるだろう。次のように書かれている。

ますら - お【益荒男・大夫・丈夫】

- ①立派な男。上代、朝廷に仕える官僚。のち女性に対して男性の通称。
- ②強く勇ましい男子。
- ③狩人。獵師。

多義にわたっている。但し、金田一博士による語義と併せて考えると、少なくとも③の意味における益荒男について述べることはここでの課題でないだろう。

附属図書館に出向き、益荒男の語義をさらに調べてみた。日本語の詳細な語義を調査することには素人であるから、とりあえず『日本国語大辞典 [第2版]』（小学館・2001年）と『角川古語大辞典』（角川書店・1999年）とを参照することにした。この結果、次のことを知り得た。

益荒男には、①立派な男子、強く勇ましいないし勇氣ある男子のほか、②朝廷に仕える官吏、③狩人、④仏陀という意味がある。但し、③は17世紀以降に現れた意味であり、④は『仏足石歌』（753年頃）に見られる古く稀な用例である。したがって、①が本来の語義と解され、現代の用法にも通ずる。①の語誌に関しては、興味深い記述がある。益荒男の語源には諸説あるが、もともと太刀・弓矢などの武具を持った勇者を指す語であった。万葉集において、おおとものやかもち大伴家持、その他大伴氏及び家持周辺の人々による歌に見られるのが①の起源のようである。家持は、大伴氏が天皇を昔から守護していたという誇りをもって、自分自身にこの語を用いていると考えられる。ここから②の意味も派生した。万葉集において「ますらお」は、女性の呼称である「たわやめ」に対して典型的な男性像と観念される。自分は、益荒男という勇者であるはずなのに、どうしてこうも心弱く恋に悩み、別れを悲しみ、病を嘆くのかと詠うことによって、人や命への執念の強さが表現されたのである。

簡単な調査であったが、益荒男という語に釈然としなかった理由をそれなりに理解した。「益荒男」という語においては、武人としての「男性像」が理想型として措定され、「勇ましい」「猛々しい」という意味と「立派な」「誇りある」という積極的な意味とが不可分に観念されている。また、このような語釈を可能とする背後に天皇制が控えていることも推測できる。しかしながら、このような理解は、

<sup>1</sup> 石川県加賀市に所在する鹿野酒造が蔵元。「山田錦、美山錦を100%まで使用し、自家精米にこだわり、白山の清冽な伏流水、蓮如上人の掘った伝説の『白水の井戸』より湧出する仕込み水を使って」醸造され、「ふくよかな香りと味、そして切れの良さは抜群であり、幾多の鑑評会金賞受賞の実績となって示されて」いる美酒とのことである。See, <[http://www.nipponnosake.com/kurashokai/k\\_jokigen.html](http://www.nipponnosake.com/kurashokai/k_jokigen.html)>, <<http://www.sake-komiyama.com/masurao.htm>>.

<sup>2</sup> 加えて、熊本県立熊本高等学校歌第4番の歌詞に「来たれますらを 人はしも」という1節がある（どのような意味かは分かりません...）。

<sup>3</sup> <<http://www.google.co.jp/>>

<sup>4</sup> 谷沢永一＝渡部昇一『広辞苑の嘘』（光文社・2001年）

マッチョ(macho)とは言い切れないにせよ、生を現実に受けた男性像を超越している。加えて、民主政や男女平等などといった現代日本における法規範及び社会規範と一線を画する――天皇制や平和主義との関係については多様な解釈があり得るが(ちなみに筆者は、天皇制の社会価値及び機能を消極に解するわけではない)、それを問題にしないとしても――イデオロギ的性質を濃厚に有している。そうであるとするならば、「益荒男」は、表面的な語義を別にして、「己の理想の姿、夢、野望等」を記すという編集委員の企画趣旨を表象する語であるとは必ずしも言えないようである。

ところで、企画書を読んでいて、今回のお題を選択した理由の一つとしてゼミ生諸君に「野望がある」ことを挙げているのが目に留まった。ある言葉が直ちに思い浮かんだ。“Boys, Be Ambitious!”である。一般に「少年よ、大志を抱け。」と訳され、戦前から国語教科書において紹介されるなど、人口に膾炙している――時には揶揄されることもある――言葉である。この言辭は1877年4月16日、北海道大学の前身である札幌農学校初代教頭クラーク博士(William S. Clark)が8ヶ月間の任を終えて帰国する際、見送り一行に発したとされる。もっとも、クラーク博士が実際に発した言葉が何であったか、そもそも博士がこの言葉を発したか否かに関しては興味深い考察があるが、立ち入らない<sup>5</sup>。何れにせよ、この言辭には「それにふさわしい価値がある」(今村成和)からである。但し、Be Ambitiousの含意については、言葉の流布ほどに知られていないと解される。ここでは二人の碩学の語釈に耳を傾けよう。

第一に、<sup>いまむらしげかず</sup>今村成和先生による解釈である<sup>6</sup>。Be AmbitiousとはLofty Ambition(高邁な志)を持つことをいう。Lofty Ambitionは、札幌農学校開校式におけるクラーク博士の演説中に見出される。彼は、Lofty Ambitionを以て、単なる立身出世の願望を超えた新時代の教育を受ける者として果たすべき社会的責任の自覚を求めたのである。クラーク博士の最初の訓えが、Lofty Ambitionを持ってというにあるならば、終わりの言葉がそれに照応していると解することで、一編のドラマは完成する。そうであるからこそ、Be Ambitiousは、人生を誠実に生きようとする者達の胸のなかで、みずからを励ます言葉としての実を備えたものとなる。

第二に、<sup>ふかせただかず</sup>深瀬忠一先生による解釈である<sup>7</sup>。Be Ambitiousは、Be Gentleman(紳士たれ、柔和たれ)とともに理解することで、より根本的な教えとなる。すなわち、前者は勇飛の精神、後者は動かぬ信念の問題であり、両者は車の両輪のように一体をなし分離できない。Be Gentlemanは、札幌農学校開学に際してクラーク博士が述べたとされる次の言明に見出される。

「今後、私が主催するこの学校ではすべての規則を廃止し、君たちに対して臨む鉄則は只一語に尽きる。Be Gentleman. これだけである。ゼントルマンというものは定められた規則を厳重に守るものであるが、それは規則に縛られてやるのではない。自己の良心に従って行動するのである」。

Be Gentlemanとは要するに――先生はキリスト者としての素養に基づきクラーク博士の宗教的背景を踏まえて語釈を展開するが、筆者はこの点を理解する十分な能力を有しないので、曲解を恐れつつこの点を捨象して要約する――、男女を問わず、良心に基づいて独立し、自由で責任ある一個の人格たれということである。したがって、Be Ambitiousとは、Be Gentlemanを根拠とする質の野心、すなわち、新たな文明を見据えた自主独立の批判的・創造的精神をもつことを意味する。このように解することで、Be Ambitiousはクラーク教育固有の本質を集約、表現する言葉となり得る。

両先生によるBe Ambitious解釈は、その手かがりについては各々個性を反映して異なるけれども、共通点がある。Be Ambitiousという言葉自体に意義を認めるわけではなく、非利己の野心と使命感に燃えた積極的行動の意欲(今村)、全身全霊を投入した教育をしめくくる精神(深瀬)といったクラーク博士の精神をそこに読みとるのである。

私見に拠ると、編集委員の企画趣旨に沿った「益荒男ぶり」とは、以上に紹介したBe Ambitiousの精神に他ならない。つまり、新時代に通用すべき公共性を備え、自由と責任を有する独立した人格の

<sup>5</sup> 当該論争につき、岩沢健造『北大歴史散歩』(北海道大学図書刊行会・[修正加筆第4刷]1993年)185-208頁参照。

<sup>6</sup> 今村成和『北大百年前後』(北海道大学図書刊行会・1981年)

<sup>7</sup> 深瀬忠一『平和の憲法と福音』(新教出版社・1990年)

陶冶に尽きる。このことの重要性は、当然であり、お説教めいているが――そうであるからこそ、Be Ambitious は説教嫌いな者の苦笑を誘うのである――、改めて確認する必要がある。自由、責任、独立、公共性の何れもが曖昧であり、具体的内容に合意があるわけでない。確かに、日々の行動の動機は不純であり、幻惑されることもままある。しかし、これらの観念を意識することなくして、思考停止に陥りがちな日常生活において自律を獲得することはできないのではないか。このゼミが、当時の札幌農学校のように、このような陶冶の場であったとは決して言わない。但し、少なくとも、ゼミ生諸君にとって一つの契機となったならば、このゼミが所期した目標は達成されたことになるろう。

柄にもないことを書いてしまった。実は学生当時、クラーク博士ことなど真面目に考えたことは1度たりとも無かった。故郷は遠くにありて思うもの。このような小稿をしたためたのは郷愁にかられただけなのかもしれない。翻って、Be Ambitious の精神と熊本の精神風土との調和を図り、今後の研究教育に生かしていくことが筆者の課題の一つである<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> ちなみに、夏目漱石は旧制第5高等学校在職当時、「秋はふみ吾に天下の志」という句を詠んでいる。この句は、大学教育センターの庭に立つ夏目漱石像側の句碑に刻まれている。岩岡中正「五高記念館散歩」熊大だより90号（2000年）18-19頁参照。